

朝河貫一の歴史学方法論序説

原 輝 史

はじめに

経済史学を専攻する筆者は、国際的比較封建制度史家でエール大学教授、朝河貫一（1873—1948年）の学問観、歴史学方法論に関心をもち、若干の拙稿および拙訳などを発表してきた⁽¹⁾。明治以降の日本が生んだトップ・クラスの歴史学者の方法論の確立過程を追体験して確認することは、経済史家としての筆者自身の方法論に関する意識を豊かなものとする。また、方法論をめぐって歴史家朝河貫一の著作との対話を試みることは、筆者自身にとって研究意欲蘇生の最上の機会でもある。このような問題意識のもとで、朝河貫一の歴史学方法論に関する予備的考察を展開することが、本稿の課題である。

ところである歴史学者の歴史学方法論を解明する場合、通常以下の二つの方法が考えられよう。第一の方法は正統的方法とでも称するもので、その歴史学者の代表的著作を綿密に解読して、その作品の分析視角や分析枠を明らかにすることから、方法論を抽出していく仕方である。朝河貫一に関してみるならば、彼自身の執筆、編集からなる二つの英文著書、即ち、1903年に刊行された『大化改新の研究』⁽²⁾および1929年刊行の『入来文書』⁽³⁾の十分な内容吟味がなされ、分析方法の特徴が解明されなければならない。また厳正な歴史家の眼をもって、

時論的問題を論じた1904年の『日露衝突』⁽⁴⁾および1909年刊行の『日本の禍機』⁽⁵⁾の分析も朝河の史学方法論を解明するのに不可欠の作業といえよう。

歴史学者の歴史学方法論を解明する第二の方法は、その歴史学者が自己の学問論、世界観、歴史観などについて歴史学の著作以外の場所で折に触れ叙述した見解を集大成することにより、その歴史学方法論の本質に迫ることである。この方法は間接的方法とも命名することができるが、場合によっては歴史家の歴史観や方法論がより直接的なかたちで吐露される場合もあり、この方法の重要性を看過することはできない。朝河貫一研究に即して考えるならば、彼が各種雑誌に発表した論文や、書簡などのなかから歴史学方法論に関する叙述を集積し、体系化することであろう。本稿では、この第二の方法にもとづき朝河の歴史学方法論の解明のための第一歩を進めることとしたい。第一の方法にもとづくアプローチは、今後の課題としよう。

1 朝河史学の前提

(1) 先行学説と朝河史学の独創性

『朝河貫一書簡集』を繙いてみて感ずることは、日本の歴史学者との文通においても、朝河の書簡には欧米の歴史学者の所説解説的文章が殆んどみられないことである。アダム=スミス、マルクス、マックス=ウェーバーなどの学説解釈学を蓄積させてきた日本の社会科学発展の歴史からみると朝河のこの態度は、一見異様にさえみえる。朝河は、自己の歴史観を語る時にも、「××の述べている如く」とか「××の理論によれば」という表現を一切使わない。あくまで直接的に自己の見解を述べるのである。従って、朝河が自己の史学方法論を確立するにあたり、影響を受けた歴史学者を確定する作業は、甚だ困難である。安積中学、東京専門学校、ダートマス大学およびエール大学時代に朝河の師事した教師たちのなかに、朝河の歴史学方法論の淵源を求める作業がひとまず必要とされよう。このうち、エール大学時代の朝河の聴講科目や指導教授に関し

ては、オーシロ・ジョージ論文が発表されている。オーシロ論文によると、朝河が歴史学方法論についてもっとも影響を受けたのは、エドワード・G. ボーン教授からであった。その研究方法は「全て原典にあたって歴史を検証する、そして資料が真正であることを証明する」というものであり、朝河は、この「正確さと緻密さとは見習うべきである」と述べている⁽⁶⁾。

このように朝河の歴史学方法論の形成に何らかの影響を与えた先行学者の分析や、朝河の所蔵文庫の分析による先行学説を追跡することにより、朝河史学の形成プロセスをより本格的に分析することが今後必要とされよう。だが他方で、朝河の歴史学方法論は、朝河自身が自己自身の思索のなかから生み出してきたものでもある。安積中学、東京専門学校時代には傑出した英語力を持つことにより欧米文明に触れた朝河が孤立感をいだき、また渡米後は、大化改新研究をPh. D. 論文として選択することにより、在米歴史家のなかでの孤独感を深めたであろうことは想像に難くない。だが、このような環境をむしろ逆手にとるかたちで朝河史学は形成されていったのではないだろうか。朝河自身、「年頭の自式」(1900年)のなかで以下のように述べているのである⁽⁷⁾。

これまでわたしは、まったくおのれひとりを頼りとし、わたし自身の努力によって、わたしの頭のなかから方法と真実とを編みださねばならなかったから、頑くかな自恃と自尊とが否応なしにわたしの導き手となってきた。

この文章は1900年の年頭に過去一年の生活を振り返り、自戒の決意を表明しているものであるが、彼の歴史学方法論に関する貴重な証言ともなっている。これによれば朝河は、「まったくおのれひとりを頼りとし」、「自己の頭のなかから方法と真実とを編み」だしてきたのである。朝河の歴史学方法論の形成には、先行学者の影響を無視することはできないとはいえ、我々はその方法論は、

何よりもまず朝河自身の思考の産物であったことを忘れてはならない。では何故朝河は、自己の方法論を独力で編み出すことができたのであろうか。

(2) 日本の史学界の欠陥

朝河が、「自己の頭のなかから手法と真実とを編み」出すことができたのは、何よりもまず、彼が1895（明28）年に日本脱出を果して渡米し、ダートマスおよびエール大学に学びながら、母国日本を客観的立場から分析の対象としたためである。朝河は、東京専門学校時代の恩師坪内逍遙宛に1912（明45）年に以下のような書簡を送っている⁽⁸⁾。

当エールに在るといふ事が、深き感化を学問の上にも及ぼし候。背後には200余年の学風及研究の習気あり、周囲には世界有数の硯学と多く接し之に刺激せられ候。その学風の独立と確固なる正、平、保守等の分子を含み候ハ、殊に好感化を日々私の心上に加へつつあることを存候。

朝河にとって、在米研究生活は、「日本にては得難かるべき自由清新の研究を為し得、日本の文化史につき自ら驚くほどの新見地、新知見を往々に得候事と信じ候」⁽⁹⁾と述べるほどの自由な発想を許す環境を準備したものであった。

この様に在米研究生活を続ける朝河にとって、日本の史学界は批判の対象となるものであった。「日本の史学近頃少しく沈滞のやうに此地にてハ感ぜられ候へども如何に候や」と三上参次に書き送った朝河は、「原料ハ史ニあらず、原料の蒐集の終はる所、即ち史学の始まるところ」と述べ、修史事業的伝統を持つ日本の史学界を批判している。そして、日本の史学界の近況について、「その遍く材料を用ひんとし又可成之を用ひること明らかなるもの二ても批評分析の法の粗ならざるものと云は誠に見出し難く思はれ候」と述べ、歴史学を単なる修史事業とは区別し、一定の「批評分析の法」=方法論に基づき記述することの必要性を説いている⁽¹⁰⁾。

三上参次に宛てた書簡と同年の岡田五兎宛書簡においても朝河の厳しい批判が展開されている。安積中学校時代の恩師岡田に対して朝河は、「研究なくして他に語ること、及び人類の経歴といふ着眼点なくして日本を研究するを今日の日本学問の二大弊に候」とまで述べている。そして「前者ハ欧米における日本学者の弊、後者ハ日本における日本学者の弊」と語り、日本における歴史学研究の欠点として「人類の経歴といふ着眼点」の欠如を指摘し、日本史研究を世界史的視点で遂行すべきことを提言している¹¹⁾。

在米研究生活を続ける朝河は、当初欧米に対する日本紹介者の役割をその任務のひとつと考えた。1905（明38）年12月27日の父正澄宛書簡で彼は、「七年前より心力を尽して勉学したる一事は、欧米に対して東洋を解釈せんことのみ」と述べ、「東洋解釈者の一人」となったことを伝達している¹²⁾。だがその後の坪内逍遙宛書簡においては、単なる時事評論家ではなく、「日本自ら日本を解する」研究者の道を志向することを伝えたのである¹³⁾。

（3）三種の知的態度（研究・評論・創作）

1907（明40）年8月、日本より帰米した朝河は、9月になるとエール大学講師に就任するが、約1年半の日本滞在を果たした彼は、日本の知的活動に関する分析を『早稲田学報』に投稿した。「日本に於る学問の傾向」と題した本稿は、朝河の歴史学研究に対する前提を知る上で興味深い¹⁴⁾。朝河は人々の知的態度には三種の別があるとする。「第一は事物の真相を知らんとする態度、第二は事物の価値を定めんとする態度、第三は新らしき事物を造り出ださんとする態度」がその三種の知的活動なのであり、第一は研究、第二が評論そして第三が創作に価する。朝河によるとこの「三態度の中何れを主とするかの別によって一人及び一国の智的生命の小事より大事に至るまで根本的影響を及ぼす」のである。

ところで明治末年の日本の知識世界は、朝河の眼には、研究の態度が評論の態度によって圧倒されているように映じた。朝河は言う、「つらつら日本今日

の智的趨勢を觀ますと科学工学医学などの外は、何れの方面も著しく研究の態度を離れて評論の態度に向って居るではありませんか」と。そしてこのような情況下において、「前途多望なる日本国の智的生命は今や恐るべき邪路に向って幾歩を転じたもの」と朝河には考えられた。

明治初期、文明開化時代に福沢諭吉などの啓蒙家が評論活動を行なったのは、日本独自の「新しい着眼点」を得なかった時代においては、それなりの効果があったと思われる。だが、開国50年を迎えようとする日本において相変わらず、この評論の態度が知的活動の中心を占め、研究的態度を圧倒していることは、日本の智的生命が、「恐るべき邪路」に陥った証明だとするのである。この方向を朝河は厳しく批判した。そして研究的態度に専念しようとする人々にとっては、「純淨の真理を客觀界に求むるの念に焦る時は主觀的評論の念は去って跡なく、再び之に触れることは知識的罪惡と感ずるに至る」であろうと、研究的態度の禁欲性を強調している。以上朝河の歴史学方法論の前提ともいうべき、彼の主張を確認した上で、次に朝河の歴史学方法論についての検討を進めよう。

2 客觀的實在史觀

(1) 客觀の實在

朝河の史学方法論に関して、最初に注目すべきは「客觀の實在」という表現である。この考え方がもっとも体系的に示されたのは、1920（大9）年の坪内逍遙宛の書簡においてである。朝河は日本の学問の欠点の一つは、「事物の眞を尊重」しないことであり、「客觀的事實を適確に研究せんとする態度」が必要であると述べている。このような態度は、歴史学研究者のみならず、日本および世界で活躍を希望するすべての人々に要求されることであった。朝河は、「眞に値ある独創も、又信念も主義も、客觀の實在に触れる所より來ることと候」と述べ、「客觀の實在」に対する誠実な態度を要求するのである¹⁵⁹。

(2) 眞理の討究

ところで、この客観の實在に触れることは真理討究の道を辿ることでもあった。『早稲田学報』に発表された1914（大3）年の論文において朝河は真理について、「真理とは、一切他の目的のため蔽はれ曲げられ飾らるゝことなき事実の真相と認めらるゝ人類の智見」と定義している¹⁶。真理についての朝河の記述は他の書簡においても繰り返し見い出される。1913（大2）年の坪内宛書簡においても、「偽を去りて真を得、蔽はれたるを開かんとするは人類根本の一大希望にて、古来漸やく進みて参り候へば、之ハ現世及世俗の福利を進むると同様に重要な事業なるべしとハ、兼々私の信念に候処」と述べ、真理討究は人類の本能的活動であり、歴史家としてそのような人類の一大使命に携わる使命感を吐露している¹⁷。さらに朝河は、1920（大9）年に、熊本済々中学校長井芹経平宛の書簡で「小生の学問は創造にも改造にもあらず、過去の真実を証明せん」とするものであり、「客観的真実を鏡の如く照すこと」が重要であると指摘している¹⁸。

（3）「年頭の自戒」にみる歴史家の任務

主観的な解釈を排除し、客観的な真理を追求しようとする歴史家、朝河の見解は1901年の「年頭の自戒」のなかで以下のように記述された¹⁹。

歴史研究がわたしの心に及ぼした効果は、いくら評価しても、しすぎにはならない。歴史的方法には不偏不党の態度と真実を真実とする態度が必要である、とりわけ党派性や先入見に流されやすい事柄について、歴史家に必要なものは、強烈な信念でも奇抜な考えでもない——純粹の真実あるのみ。歴史家は一切の道徳的知的な架空の産物から自由でなければならず、頭は鏡のごとくあらねばならぬ、歴史家たるものの必要条件は、歴史性に対する吟味、判断の公正さ、広大な比較と深い洞察に培われた鍛えられた想像力である。いかなる主観的な傾斜——たとえそれが最高の宗教的理想であろうと——も歴史家としての職能を果たしている際であれば、その歴

史家の頭のなかに影をとどめていてはならぬ。この「歴史家の公正な」精神状態は、無原則とは区別されねばならぬ。この精神状態は諸原則を駆逐するものではなく、諸原則を超越するものであるから。歴史家の立場の晴朗な尊厳は、ここにこそある。歴史家は善悪ともにわきまえ、最も明るいものと最も暗いものとを区別するのだ、一種神のごとき英知と愛によって。いかなる世俗のしがらみも、いかなる超俗の教義も、歴史家の到達する結論を歪めるほど強くはなく、また証拠を欠いている場合に、[しがらみや教義が] 結論を指示するほど強くはない。まことの歴史家のもつべきいくつかの特徴をあげれば、このようなものであろう。

歴史家の任務に関する朝河のこの「マニフェスト」は、本稿を作成するにあたり参照しえた文章のなかでは、最大の迫力をもって筆者に迫るところがあった。朝河の歴史観は凝縮されたこの文章のなかに集約されている。この文章の前半と後半においては論理の逆転が用意されており、歴史家の持つべき公正な態度は、「諸原則を駆逐するものではなく、諸原則を超越するもの」だと表現が、その逆転の意味をとく鍵である。

(4) 歴史研究における「蒸溜法」

朝河は、歴史学においては、投入される能力や努力に比較して、発見される真理がいかに少量のものであるかをたえず指摘している。客観的真理追求の歴史学の方法を彼自身は、「蒸溜法」と名づけている。「蒸溜法」という表現がみられるのは、1915（大4）年の早大教授五十嵐力宛の書簡においてである⁽²⁰⁾。この書簡において朝河は自己の研究について「年来の如く日本封建制度の起源を徐々として根本材料より取調中に候」と述べたのち、「是ハ殆ど蒸溜法とでも申すべきものにて、労と時との多きニ比して結果ハ遅く又甚少候」と結んでいる。入来文書の根本的吟味と英訳に集中していた朝河にとって、その投入された努力はごく少量の発見を得ることによって正当化されるものであった。歴

史のなかから、根本史料をさがし出しそれを分析することにより真理を発見する作業の遅効性について朝河は、他の個所でも次のように触れている。即ち「学問の方面によりては、真の効果を得ること極めて遅く極めて少く、恰も一斗の汚水を蒸溜して僅に数滴の浄水を得るが如く、又は杵大の鉱石を磨きて一点の宝玉を得るに等しきこと」と述べている²¹⁾。明治期の日本が急激な近代化を達成するために必要とした応用の学問、速成の学問に対して、朝河の「蒸溜法」による歴史学は、あくまでの原理的、基礎的な学問を追求しようとするものであった。

(5) 外皮としての実証主義

「客観の實在に触れる」ため真理の追求に励む朝河の歴史学が実証的であることは、しばしば指摘されるところである。前出のオーシロ論文で指摘されたように、朝河はエール大学大学院の E.G. ボーンから原典主義や史料の徹底的吟味の方法を学んだ。

朝河が理論家でなく、実証史家であり彼が理論家でなかったことが、かえってその研究の価値を永続させることになったとの堀米庸三の主張が欠吹論文で紹介されている²²⁾。だが筆者自身は、朝河が「理論家ではなく実証史家であった」とするこの規定に対して若干の疑問を覚えざるをえない。というのは、本稿執筆にあたり参照しえた朝河書簡などによる限り、朝河が原史料の重要性やテキスト・クリティークなどにつき言及している場合は殆んどみられず、むしろ「原料ハ史にあらず、原料の蒐集の終はる所、即ち史学の始まるところ」と述べ、分析方法そのものに対する多大の関心を示しているのである。従って筆者は朝河の歴史学方法論は、実証主義の外皮をかぶったものであり、その本質は他に求められねばならないと考えている。日本の歴史家が分析対象とする史料の分量と比較するとはるかに少量の入来院家文書を分析して、日本封建制を欧米に紹介しえたのは、朝河の方法論がきわめて理論的であったことを示唆しているのではないだろうか。

(6) 朝河史学方法論における論理の展開

朝河の客観的實在史観にもとづき、客観的真理を「蒸溜法」によって追求し続けるという方法は、史実を史料をして語らせるという方法論とは異質である。また M. ウェーバーの「価値判断からの自由」(Wertfreiheit) に立脚した客観主義とも異っている。1901年の「年頭の自戒」を再度検討してみると、朝河は歴史家の持つべき不偏不党の公正な態度を主張しながらも、「この歴史家の公正な精神状態は、無原則とは区別されねばならぬ」と述べて、単なる客観主義や実証主義とは明らかに異った立場を主張している。さらに朝河は、「この精神状態は諸原則を駆逐するものではなく、諸原則を超越するもの」だと述べたのち、「歴史家は善悪ともにわきまえ、最も明るいものと最も暗いものとを区別するのだ、一種神のごとき英知と愛とによって」とまで述べているのである。「一種神のごとき価値判断による歴史分析」、これこそが朝河の客観的實在史観の内容といえるであろう。客観的實在史観という急坂を登りつめたところ、突然眼下に広大な眺望が開けるがごとく、朝河の歴史学方法論は、突然施回を示す。即ち無味乾燥な実証の世界ではなく、ある原則をもつ理想的な世界史の発展が眼前にひろがってくるのである。この突然の施回過程を朝河自身の文章によって以下みていこう。

3 理想的歴史上向観

(1) 理想主義と歴史上向観

客観的實在史観の内部に準備された朝河の歴史観は、理想的歴史上向観とも言うべき、世界史観である。朝河は人間を道德的存在、——理想にむかって不断の努力を続ける生命体——と考えていた。例えば1893(明26)年2月9日の高橋春吉宛の書簡においても、「人生最大の快事は理想の天地を作るにあり、人は理想の動物也。理想と共に進化し行く産物也」と述べ²³、人間の存在やその活動を性善説の立場からとらえているのである。また翌年の渡辺熊之助宛書

簡においても「私は孔子ニも基督ニも釈迦ニも失望仕候。人類円満の相は、比人々に尽きしニあらず、もし尽きたりとせば、人はもはや進化の頂ニ達したることあるものニて、万事過去にはや具足し、前途に望をかくるは無駄なるべく候。過去ニもし円満ありたらば、人間は実ニあさましきものに御座候はずや。私は人は最後まで円満に向ひ進むもの、大問題は無限に残るものと信候」²⁴と述べている。この文章から明らかとなることは、人類の歴史は古代において最盛期を誇りそれ以降停滞へと向ったとする歴史下降観ではなく、歴史は時代を経過するに従い無限の進化を遂げていくのだという。歴史上向観を朝河自身がいただいていたことである。その思想の背後には、「人間は最後まで円満に向ひ進むもの」という、楽観的理想論がみられた。このような理想論の背後には、「真ならざることは決して永久なる能はざること史の証する所」²⁵とする朝河の確固たる確信があったのである。

(2) 普遍的概念としての「人類」

ところでこのような理想主義的、上向的な歴史観の基礎にあるキイ・コンセプトは、「人類」という概念であった。朝河自身「極めて若い頃から『人類』という立場からものごとをみようとした」ことが遠藤海蔵論文によって指摘されている²⁶。例えば朝河は、1899（明治32）年に両親宛に書簡を送り、アメリカ滞在による別離を惜しむ父に対して「貫一を人類ニ与へた」ものと覚悟してくれるようと述べ、自身が「日本と人類の統一進歩」の為に貢献する旨決意を伝えている²⁷。また、1913（大正2）年の大隈重信宛書簡においても、「未だ曾て人類に知られざりし新資料又ハ新知見を学界ニ貢献することが専務」だと自己の任務を規定しているのである。以上の引用からも明らかのように、朝河自身、自己の人生を「人類」に貢献すべき存在、と規定していたことが明らかとなる。個別民族への貢献ではなく「人類」への貢献という普遍的概念をおそらくはキリスト教の思想から学びながらも、自己のものとして体得し、自己の人生観として骨肉化しえたところに朝河の非凡さがみられる。

この「人類」が上向的に発展し続ける過程、これこそが朝河にとっての世界史の発展形態であった。朝河は、時論的問題を議論するにあたって、「義」、「正義」、「大義」などの表現を用いている。峰島論文によれば、「正義」は大にしては人類、中にして自国、小にして個々の国民に関係する。また個々の国民の中心は愛国心であり、その中核が武士道即ち「義」なのである。峰島論文は、朝河史観のなかにヘーゲルの「世界史は世界審判である」(Die Weltgeschichte ist die Weltgericht) とする歴史哲学との類似性が存在することを示唆している²⁸⁾。だが、筆者の検討した限りにおいては、朝河自身が「人類の発展の歴史は正義発展の上向的過程である」と明確に記述している個所を見出すことはできなかった。大畑論文の記述するように「朝河は国際政治を論ずる際に」のみ「しばしば正義や公正に言及」したのである²⁹⁾。従って朝河が「人類発展の歴史は正義発展の上向的過程である」とまで考えていたと速断することはできないであろう。

(3) ナチズム批判の方法

朝河は一貫して日本の対外膨張政策を批判してきた。だが、彼の理想的歴史上向観がより明快に看取されるのはナチズムに対する彼のコメントにおいてである。S.C. パートレット夫人宛の1940年の書簡は、「独裁国家は注文通りに歴史を作ろうとするでしょうが、歴史は決して人間によって衣服のように仕立てられるものではありません。歴史は限りなく複数かつ微妙なものであり、それを自分の意志に服させようと狂奔する考案者あるいは国家の最高の智恵と努力と較べても、より強力であり、黙って、しかし確実にそれを葬り、それらの仕業を破壊します。……非歴史的な力の成功はいずれも、これまで常にそうであったように束の間のものにすぎず、一時的後退は人類進歩の永遠の過程における新段階の予言である」³⁰⁾と述べている。ここでは、独裁国家の一時的繁栄も、長期的な歴史の試練にたえるものではないことが確信をもって語られている。だが、何故そうなるのか、は明示的に示されていない。

4 朝河史学にみる歴史発展の原動力

(1) 非経済的要因の重視

朝河の歴史学方法論が唯心論の立場から、歴史発展の原動力を非経済的要素に求めていたのは明らかである。封建制の研究を生涯の課題とした朝河ではあるが、その分析視角は経済史的視点に置かれていたのではない。従って唯物史観に立脚するマルクスの封建制度と朝河のそれとを比較する場合には（例えば福留久大論文）³¹⁾、比較の出发点において両者の歴史哲学の決定的差異がまず認識されるべきであろう。朝河が、歴史発展の原動力として、精神的要素を重要視していたことはほぼ断定することができる。例えば、1948（昭和23）年A.P. ストークス宛書簡で朝河は、「何十年もの間の私の研究はすべて、それぞれの社会意識の形成過程とその歴史的な表われの特異な方法という単一の問題に向かってきたのです」と述べている³²⁾。この朝河の独白を信ずるならば、彼が生涯かけて研究してきた日本封建制とは「社会意識」が歴史的に「特異な方法」で結晶したものだったとも考えられる。

さらに朝河は1948（昭和23）年の滝川政次郎宛書簡において「各国民の心理」の歴史的分析こそが歴史家の最大の任務のひとつだと述べている³³⁾。

史家が常に考量すべき主題の一は、各国民の心理作用の特徴也。如何にして次第に之が築造され来りしや。如何に此心癖が環境に接して表現され来りたるか。その諸史期における作用と変遷とは如何。諸期を貫通する特殊性如何。諸国交流の場合、如何に其の名の殊心が互働するや、此互作用が各自の心理に反応したる状如何。之による実史影響は如何。政治史のみならず、文化史も、法制史さへも皆追々に展化する活物なりとせば、此根本の心史を多少捉ふるにあらずば浅薄を免かれず。

以上の引用からも明らかなように、歴史家としての朝河は「社会意識」や「各国民の心理作用の特長」という非経済的、精神的要因の分析を最重要視していたと結論づけることができる。朝河史学のなかには、『資本論』（1867年刊）に代表される唯物史観の影響を見い出すことはできないし、ロシア革命（1917）に対しても批判的であったことが推測されよう。従って朝河が研究対象とした「封建制」とは「生産様式」としてのそれではなかったのである。

（2）宗教の役割の重要性

ところで精神的要因のもっとも組織的発現形態のひとつとして宗教をあげることができよう。朝河の宗教に対する考え方はどうだったのであろうか。既に1915（大4）年の五十嵐力宛書簡で「日本の宗教と社会事情及要求との相関係せる点に関する発見」がみられたことを書き送っていた朝河は³⁴、1931年 M. ブロックの主宰する『社会経済史年報』（Annales d'Histoire Economique et Sociale, Paris）に「日本の社会経済史上における宗教の位置」と題する論文を公表した。本論文のなかで朝河は、社会、経済に関する歴史研究が進んできたのにもかかわらず、それらの研究は、「社会を変革する根本的な力」の検討を無視してきたと指摘し、「宗教と経済および社会構造との関係」を分析する点の重要性を強調している。そして朝河は、仏教を中心に分析を展開するが、それは「仏教は、神道やその他の宗教よりも、日本の社会的発展、精神的かつ文化的進化に決定的な影響を及ぼした」からである³⁵。以上の諸引用から、朝河が歴史を動かす起動力として、「社会意識」や「各国民の心理作用の特徴」を重要視し、これらの要素の終局的表現形態として「宗教」を考えていたことが明らかとなった。

「宗教」に代表される精神的要素が、社会変動の基礎にあるとする朝河の史観は、ナチス抬頭を説明する場合にも適用される。ゲルマン民族がナチズムを受容した理由を説明した1940（昭和15）年の村田勤宛の書簡で朝河は、「ソハ心理的理由の一端二候。心理学者の所謂。『劣等偏僻』（inferiority complex &

psychosis) に候」³⁸⁾と心理的要因をあげているのである。また他の書簡では、ナチズムの抬頭は「人間が過去何十年か陥ってきた道徳的弛緩の帰結を刈り取っているのだ」³⁷⁾と述べ、民主主義政体下では、「個々人の責任ノ心ハ最も弛ミ易ク」³⁸⁾、各個人の不断の自省自奮が必要とされると主張した。

(3) 弁証法的発想

だが朝河の発想は、精神的要因を平板な単線の次元でとらえるのではなく「弁証法的」発想で解釈し、世界史の発展を説明しようとする。以下に引用するのは、A.E. モーガン宛の書簡で、朝河が第2次大戦時のイギリス、フランスという民主主義国グループとドイツ、イタリアの独裁国家グループとの対立を説明した部分である³⁹⁾。

西洋における発展の一般的方向は、人類が少なくとも過去に引き起こした中では最も巨大な闘争へと収斂していったということです。すなわち、一方は西洋の政治文化の頂点をきわめるものであり、他方はそれに対する鋭い反対命題です。前者がその核心において後者とは対立するものであることを証明するために、神は後者をお与えになられたように思えます。なぜこのような恐ろしい悲劇を準備する必要があるのでしょうか？私が推測するには、文明の前衛が最近是自己に忠実なことを証明しておらず、警戒心もゆるみきっており、世界におけるその使命実現を再起させることが是が非でも必要となったからです。

この書簡文からは、朝河のもつ弁証法的発想と世界史発展を神の意思が規定しているとも思わせる表現がみられる。他の書簡においても朝河は歴史発展の原動力に触れ、「歴史は大勢の人々の闘争と犠牲を通じて作られるものであり、その進歩のためにはしばしばそれを必要とするのは事実です。しかし歴史は人間とより高い力の合作であるというのが、より真実であります」⁴⁰⁾と述べたの

である。従って朝河が世界史の発展過程を「人間の精神的要素」と「より高い力=神」との協働作用とみていたとも考えられよう。

むすび

本稿の「はじめに」において指摘したように、朝河の歴史学方法論研究には二つの方法がある。本稿では、第二の方法即ち、朝河書簡および朝河の歴史学著作以外の諸論文を検討することにより、朝河史学の特徴を分析してきた。(1)「朝河史学の前提」においては、事物の真相を究明する研究的態度に対する朝河の高い評価が明らかにされた。(2)「客観的实在史観」においては、主観を排除しあくまでも客観的实在を求めようとする方法論が説明された。だが、この客観的实在史観は、単なる実証主義史観とは一線を画しており、客観的实在を追求する過程そのものが、一種の価値判断を生み出すことが指摘され、朝河歴史学方法論の論理的転回が注目されたのである。さらに(3)「理想的歴史上向観」においては、理想主義的人間観を持つ朝河が、「人類」という普遍的概念を生涯持ちつづけることにより、世界史の発展がたえず上向的に発展する過程と考えていた点が明らかにされている。最後の(4)「朝河史学にみる歴史的発展の原動力」においては、朝河が非経済的要因として宗教の役割を重視していた点が指摘された。この点については、既に金井円論文においても、朝河は「ヨーロッパではキリスト教が、日本では仏教が封建制度の基礎にあったとの仮説」に立って『大化改新の研究』を進めた点が指摘されている⁴¹。

ところで本稿で触れることができなかった方法論上の二点について追加的に述べておきたい。第一点は比較史的方法論に関する見解である。本稿を作成するにあたって、筆者が検討しえた書簡などにおいては、朝河自身比較史について述べている文章を見い出すことができなかった。朝河自身は、比較史の方法論について黙して語らないが、M. グロックが朝河の才能を評して以下のように述べている。即ち、M. ブロックによれば、天性の歴史家 (historien de

métier) として朝河は、比較史家の備えていなければならない才能のひとつ、「数似性と相違性との両者を慎重に見分けることのできるセンス」⁴²を具有していたのである。

もう一点は、「朝河学の第一頁にいう『歴史学とは熱なき光である』」と柳沼論文で指摘された朝河による歴史学定義の問題である。この表現は、松本重活が『最後の日本人』の「序に代えて」において、朝河自身から直接に伝聞した定義として紹介し、広く知られるところとなった⁴³。だが残念なことに筆者は、朝河自身が歴史学をこのように定義した文章を見出すことはできなかった。だが朝河貫一の美的感覚を論じた中田勉論文によれば、朝河は「秩序のなかに美を明出し」、「その感性は光に向けられる」のである。そして朝河は「真の美は光の背後に隠された影のうちに見出される」と考えていたことを付加しておこう。

歴史における非経済的要因を重視した朝河が、何故宗教史や文化史でなく封建制度史を生涯のテーマとして選択したのか。また『大化改新の研究』や『入来文書』の研究において、本稿で明らかにした歴史学方法論は、どのように貫徹しているのだろうか。これらの分析が筆者に残された今後の課題である。

注(1) 拙稿「国際知識人の先駆——朝河貫一博士の書簡コレクション——」（『書齋の窓、第333号、有斐閣、1984年）。拙稿、「二人の比較史家——朝河貫一とMブロックの『社会経済史年報』誌上論文——」（朝河貫一研究会編『朝河貫一の世界——不滅の歴史家・偉大なるパイオニア——』、早大出版部、1993年）所収。拙稿「朝河貫一『日本の社会経済史上における宗教の位置。』（『社会経済史年報。1931年、パリ）をめぐって」（『早稲田商学。第357号、1993年）。なお、朝河貫一書簡編集委員会編『朝河貫一書簡集。（早大出版部、1990年）には、拙訳Mブロック宛朝河書簡が、書簡番号、146、159、168および192として収録されている。

(2) K. Asakawa, *The Early Institutional Life of Japan, A study in the Reform of 645 A.D.* 1903.

(3) K. Asakawa, *The Documents of Iriki*, 1929, Yale University Press, New Haven.

(4) K. Asakawa, *The Russo-Japanese Conflict——its causes and issues——*, 1904

(5) 朝河貫一『日本の禍機』（実業之日本社、1909年）。なお本書は、最近宗高書房（1980年）および講談社（1987年）によって復刻された。

(6) オーシロ・ジョージ「日米史学のパイオニア、朝河貫一の海外留学」、前出『朝河貫一の世界』、45ページ。

- (7) 朝河貫一「年頭の自戒」(1900年), (『朝河貫一書簡集』735頁)。
- (8) 坪内雄蔵宛書簡(書簡番号52番) 1912(明治45)年3月12日付。(『書簡集』188頁)。
- (9) 注8)参照。
- (10) 三上参次宛書簡(53番) 1912(明治45)年3月24日付。(『書簡集』189頁)。
- (11) 岡田五兎宛書簡(56番) 1912(明治45)年, 6月2日付。(『書簡集』193頁)。
- (12) 朝河正澄宛書簡(34番), 1905(明治38)年, 12月27日付。(『書簡集』161-162頁)。
- (13) 坪内雄蔵宛書簡(52番), 1912(明治45)年3月12日付。(『書簡集』189頁)。
- (14) 朝河貫一「日本に於ける学問の傾向」(『早稲田学報』第152号, 1907(明治40)年10月, 6-8頁)。
- (15) 坪内逍遙宛書簡(案)(102番), 1920(大正9)年6月20日付。(『書簡集』274-275頁)。
- (16) 朝河貫一「在外日本人学生諸君に対する一希望」(『早稲田年報』1914(大正3)年3月) 19-20頁。
- (17) 坪内雄蔵宛書簡(65番), 1913(大正2)年12月21日付。(『書簡集』206頁)。
- (18) 井芹経平宛書簡(103番), 1920(大正9)年6月27日付。(『書簡集』278頁)。
- (19) 朝河貫一「年頭の自戒」(1901年), (『書簡集』741頁)。
- (20) 五十嵐力宛書簡(76番), 1915(大正4)年, 11月28日付。(『書簡集』241頁)。
- (21) 前出注10)論文, 20頁。
- (22) 矢吹晋「朝河貫一の世界封建制論」, 『朝河貫一の世界』128頁。
- (23) 高橋春吉宛書簡(3番), 1893(明治26)年2月9日付。(『書簡集』95頁)。
- (24) 渡辺熊之助宛書簡(9番), 1894(明治27)年11月13日付。(『書簡集』105頁)。
- (25) 三上参次宛書簡(50番), 1911(明治45)年1月20日付。(『書簡集』186頁)。
- (26) 遠藤海蔵「朝河貫一の道德思想」, 『朝河貫一の世界』, 101頁。
- (27) 朝河正澄・エヒ宛書簡(24番), 1899(明治32)年7月29日付。(『書簡集』137頁)。
- (28) 峰島旭雄「朝河貫一の人・学問・宗教」, 『朝河貫一の世界』, 59頁。
- (29) 大畑篤四郎「朝河貫一の国際政治観」, 『朝河貫一の世界』, 145頁。
- (30) S.C. パートレット氏夫人宛書簡(222番), 1940(昭和15)年9月8日付。(『書簡集』551頁)。
- (31) 福留久大「マルクス・朝河・封建」, 『朝河貫一の世界』111-121頁。
- (32) A.P. ストークス宛書簡(294番), 1948(昭和23)年, 5月16日付。(『書簡集』721頁)。
- (33) 滝川政次郎宛書簡(296番), 1948(昭和23)年, 6月27日付。(『書簡集』722頁)。
- (34) 五十嵐力宛書簡(76番), 1915(大正4)年11月28日付。(『書簡集』241頁)。
- (35) 拙稿「朝河貫一『日本の社会経済史上における宗教の位置』をめぐって」(『早稲田商学』第357号, 1993), 158頁。
- (36) 村田勤宛書簡(225番), 1940(昭和15)年10月5日付。(『書簡集』558頁)。
- (37) C.M. アンドルーズ夫妻宛書簡(229番), 1941(昭和16)年2月16日付。(『書簡集』565頁)。
- (38) 村田勤宛書簡(224番), 1940(昭和15)年9月29日付。(『書簡集』553頁)。
- (39) A.E. モーガン宛書簡(244番), 1941(昭和16)年12月14日付。(『書簡集』602頁)。
- (40) S.C. パートレット氏夫人宛書簡(222番), 1940(昭和15)年9月8日付。(『書簡集』550頁)。
- (41) 金井円「比較制度史家としての朝河貫一」(『書簡集』23頁)。
- (42) 拙稿「二人の比較史家——朝河貫一と M ブロックの『社会経済史年報』誌上論文——」, 『朝河貫一の世界』240頁。
- (43) 松本重治「序に代えて」阿部善雄『最後の日本人——朝河貫一の生涯——』(岩波書店, 1983) 11頁。
- (44) 中田勤「朝河貫一の人格形成と美的感覚について」, 『朝河貫一の世界』, 73-76頁。